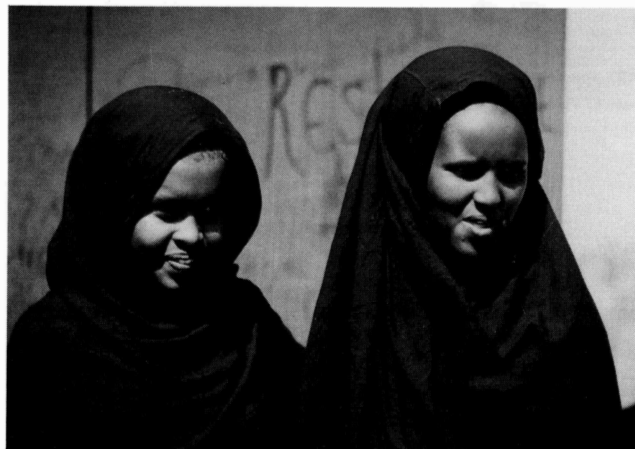


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.91

試 行 錯 誤



ソマリア



カンブチア

特集 JVC活動事典 '89

JVCのめざすもの	2
ソマリア 見直しの時期にさしかかる	3
エチオピア 村人が自発的に動き出す	4
インドシナ難民 膠着状態を脱する	6
カンブチア 明るくなった人々	8
タイ 村の再生をめざして	10
ラオス 難民を出さない国づくりを	11
日本国内 多様化する問題	12
第7回会員総会 新事務局長に林 達雄さん	14
A・Gの見た総会と総会前夜祭	16
サードワールド・NOW	18

JVCのめざすもの

——活動の基本方針が決まる

広がる活動領域

JVCは難民救援団体として位置づけられることが多い。インドシナ難民、エチオピア難民(ソマリア)、エチオピア被災民への救援活動というように、1980年の設立以来難民救援はJVCの活動の大きな柱となってきた。しかし難民といっても常に緊急状況が続くわけではない。医療・食糧の問題が一段落すると、教育、文化活動、定住するための技術訓練、あるいは農業、植林とその活動範囲は多岐にわたるようになる。今私たちが力を入れているエチオピアとカンパチアの活動は、緊急状況を脱した人々への復興協力といえる。もはや彼らは難民や被災民ではないが、荒廃した村の再建を自力で行うことは困難となっている。ある意味では開発プロジェクトといえる部分もある。状況の改善にともない終了したプロジェクトがある一方で、このように必要に応じて新たなプロジェクトを設け活動の領域を広げてきた。今では難民救援団体というわく組の中ではとらえきれなくなっている。

昨年からJVCは環境問題への取り組みに力を入れている。世界的に環境問題がクローズアップされているということばかりではなく、私たちが活動を続けるなかでこの問題を避けて通れないことに気づいたからだ。難民や被災民を押し出す力となっている干ばつや飢餓、あるいは貧困の原因を追っていくと、農地の荒廃や森林伐採による自然破壊にたどりつく。根本的な問題を解決しなければ難民問題も解決しない。“難民問題の解決をめざす”JVCとしても環境問題にも取り組まざるを得なかったのだ。活動の広がりとは当然の成りゆきといえるものの、JVCが環境問題にまで首をつっこむのは自分の力をわきまえていないのではないかと、JVCはいろいろなことをやっているが何をめざしているのかわからないとの指摘があることも事実であった。

昨年の総会場で会員から「JVCは何を基準にし

て活動を行っているのかわからない。基本となるものがほしい」との声が上がった。前ばかり見て一般の人にJVCを理解してもらうための努力をしてこなかったことへの反省もあり、今年の総会までに活動方針を作成することが決まった。執行委員会はこの決定を受け、さらに小委員会での草案を練った。

JVCの特徴

この中で示されたJVCの特徴をいくつかあげてみると、

- ・組織としてはまず現場を優先する。本部での決定が一方的に現場に伝わることはない。プロジェクトの決定権は現場にある。(I-4 JVCの組織)
- ・JVCは参加する者の意志によって成立している。それぞれが独自の活動をしながら星雲のようなまとまりとなって運動する。(I-7 JVCの組織的特徴)
- ・JVCは単なる善意の集団ではない。国家のわくを越え地球市民として新しい価値の創造をめざす。

(II. JVCの基本姿勢)

また、どのようにプロジェクトを立案し、遂行していくのかについてはⅢの「JVCのプロジェクト」に詳しく述べられている。現場で活動する人はもちろん、国内で活動を支えている人々にもぜひ読んでいただきたい。緊急援助、開発協力、そのどちらに重点を置くのかについては本誌でもたびたび議論されてきた。今では場合に応じて一番必要とされる援助(協力)を行うことが合意されている。生存の危機を脱した人々に対しては、再びそのようなことが起こらないために保健衛生や農地の回復に力を入れる。しかしそのような場合でも緊急状況に対応できる体勢は整えておく。建て前が先に立ち活動が硬直化することは避けなければならないと思う。

なおこの基本方針は暫定的なものであり、状況の変化に応じて将来的には手を加えることになるであろう。(編集部)

ソマリア

見直しの時期にさしかかる

●難民の自立促進・定住のための農場建設

ソマリアに流入したエチオピア難民の自立と定住を目的として、1983年から農場建設を行っている。89年3月現在でマガネイ難民キャンプとハルバ難民キャンプの農地は215ha、対象家族は307である。また昨年からの農場建設に着手したジャララクシ難民キャンプも35ha、41家族になった。

●植林

苗木を農場、難民キャンプ、移住村などに配っている。

●その他

現金収入を得るために水屋、パン屋、かじ屋を始める難民たちに資金を貸しつけている。また語学クラス（英語）、養蜂指導、養鶏指導も行っている。



難民の移住をめぐる問題

ハルバ難民キャンプの周囲では、難民キャンプから農場のそばに移住する難民が増加している。ハルバの10カ所の農場に196家族が移った。

ところが去る2月、「農場周囲に移住した難民はすべて元の難民キャンプに速やかに戻れ」という命令が郡長から突然出された。理由は、移住した難民と地元民との間で土地の使用などをめぐる問題が多く、また、難民たちによる木々の伐採で土地の砂漠化も起きている、というものであった。数カ月後、一応この問題は解決したが、郡長があげた理由のさらに奥に、もっと深いわけがあると思われるので、地元の権力者による難民への揺さぶりは今後も起きる可能性が十分ある。

グループ・ファーマリングが定着

1986年から採用し始めた「グループ・ファーマリング方式（共同農場）」が難民や地元民の間に定着し、一部の農民はUNHCRからの食糧援助がなくても農場の収穫で足りる者も現れ始めた。また、ルーク地区にある14カ所の農場のうち、4つの農場で町から燃料を自己調達できるようになった。その調達をいまだにJVCに依存している農場も購入費の一部をJVCに返金する者が増えてきた。

状況打開をはかるUNHCR

今年3月、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）モガディシュ事務所の代表と会談した。「10年もの緊急援助は長すぎる。このような状況は変えなけれ

ば。UNHCRは今年7月から食糧援助を段階的に減らし、遅くとも1990年末までには完了する、断固」と代表は力説した。

その後、ソマリア政府とUNHCRとのトップ会談がジュネーブで続けられ、結果的には、UNHCRの主張がかなり退けられた内容で合意された。その合意のポイントは、①エチオピアへの帰還をより積極的に進め、帰還登録をした難民は帰還まで従来通りの食糧援助を受けられる。②ソマリア国内に定住する難民に対しては1990年一杯で食糧援助を終了する。しかし、1991年以降は、UNHCRだけでなく、他の国際機関や政府の支援を得て、この種のプロジェクトは実施される。

JVCの今後の課題

大きく分けて3つある。①社会的側面、②自然環境的側面、③難民たちの意志、である。①の例として上述の郡長の命令があげられる。②の例としては農地の地力低下。③の意志とは、「食糧援助がなくなり、故郷に帰れる状況になっても、難民たちが今の地に留まり農業など営んでいく気が本当にあるか」である。いずれも一筋縄ではゆかない大きな課題である。もちろん従来から、これらも念頭に置いて活動してきた。とりわけ、②の問題に対しては、農場の拡大と並行して、各種の試みを繰り返してきた。

とはいえ、プロジェクトを始めて約6年。これらの課題に対し何らかの見通しを持つべき時期にさしかかっている。実際いま、現場を中心に従来の活動を評価し、今後の対応を見直しつつある（鶴田）。

エチオピア 村人が自発的に動き出す

●総合的復興促進計画

破壊された生態系の回復、生活改善によって飢えることのない村づくりをめざす。

(1) 農業・保健栄養教育

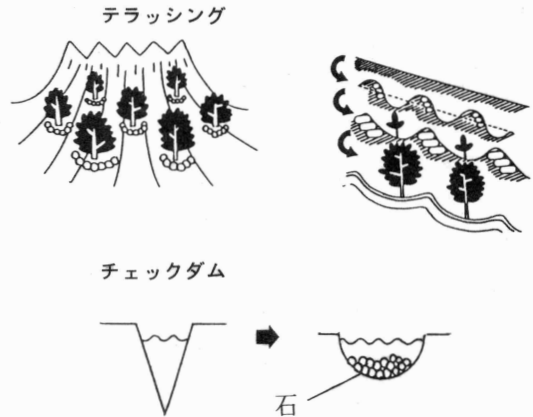
母親学校で学んだ生活改善の方法を、受講した母親たちが家庭訪問活動によって村人に伝える。

(2) 植 林

木々の失われた山間部の斜面、家のまわりなどにユーカリ、アカシアなどを植林する。

(3) 土壌保全

ガリ浸食防止のためのチェックダム、表土が流されている山の斜面をテラッシングする。



1988年は前年の干ばつとうって変わって洪水の年であった。マーシャ村をつらぬくツルテ川（普段は川幅1mの小川）が増水し、数十倍にもふくれあがった。橋が壊れたり、食糧を運ぶトラックが流されたりもした。ただしマーシャ始まって以来の大雨とはいっても日本の梅雨時の集中豪雨と比べると、たいした雨量ではない。問題は森がないために、降った雨の90%が土中にしみ込まずに地表を流れ去る事による。エチオピア高原に降ったこの雨は青ナイル川を介してスーダンに洪水を起こした。高地斜面の環境問題（森林伐採・保水力低下）は国境を越えて、河川下流域に影響をおよぼす。1988年のマスコミの注目を浴びたスーダン、バングラデッシュ洪水の原因は、上流地域であるエチオピア、ネパールの森林伐採にあるわけである。

こうした地球規模の環境破壊の最前線エチオピアで、飢えの問題に向こうをはったJVCのプロジェクトの小さなこと。大地の一角にへばりついた蟻のごとくである。延々と連なる禿げ山の片隅にせつせと石を積み、樹木の苗木を植えている。他に復興の方法がないとはいえ、圧倒的な物理的環境破壊の進行に押し潰されそうである。

3年間の活動を経て希望の光は人々の変化である。子育て、水汲み、粉挽きと重労働に追われ、しかも地位が低く男性の陰にあり、人前で語ることもなかった女性たちの中に若干の変化がみられ始めた。村々を廻って、野菜の作り方や保健栄養の指導を行うようになった女性たちの活発なこと。的を得ている

か否かはわからぬが、ミーティングで積極的に意見を述べる彼女たちの姿は美しい。かつて夫に捨てられた女性たちが今では村の人気者になっている。

また植林の意義等を題材とする村芝居が受けている。マーシャ村で作られ、村人自身によって演じられる芝居はなかなかのもので、即興劇の背後に歴史の重みを感じさせる。小学生、母親、男たちと対象を広げ、頭がかたくて教科書どおりの発想をしがちな役人たちの教育にも使うつもりである。

スタッフも元気である。大学出の専門家でもないごく普通のエチオピアの若者？たちが植林、農業、保健教育等各プロジェクトの責任者として頑張っている。日本人もまけてはいない。首都アジスアベバでは鈴木夫妻が政府相手に交渉を続け、現場調整員山田はエチオピアに根をおろし、新任の農業技術者江原夫妻もただ者ではない。日本国内ではチャリティーウォーク等のイベントを担うボランティアたちも積極的で、毎晩おそくまで企画会議だ。

エチオピア人と日本人、国民一人あたりのGNPで1:100、物質的な豊かさにおいて対極をなすにもかかわらず、われわれには共通点も多い。センチメンタルで長いものに巻かれるところなどよく似ている。両者が触れ合う機会として昨年からスタディツアー（来年は2月）に加え、今年からはエチオピア人の日本への招聘（9月～10月）を企画している。エチオピアの地域の実状を伝える本物の使者である。

（林）

マーシャ村にはなんにもないけれど

伊藤 幸子

エチオピア。この国の首都であるアジスアベバとその周りを囲む農村を行き来するたびに、都市と農村の境にこそ国境があるのではないかと考えてしまう。それほど都市と農村の暮らしぶり、物やサービスのあり方に差が大きい。そしてもっと驚くことは、農村の人が都市を知らないのと同じくらい、都市の人が農村のことを知らない、知ろうとしないこと。いや、知りたくないと言った方が良いのかもしれない。もちろん、都市の青年は、農村に住みたいなどと考えたこともないだろう。ある時、日本からの客におめつけ役としてついてきた若き役人、マーシャに着いたとたん、「街につれていけ。ホテルに泊まる。こんな電気もない所には住めない。めしもまずい」ここはあなたの国だと言っても耳を貸そうとはしないでしょうね。

さて、本当に農村には電気がない、水道がない、ましてやガスなんかない。テレビも冷蔵庫も、風呂もなければ水洗トイレもない。スーパーなんてない。車も来ないし、新聞も来ない。人の行き来も、ロバや馬で荷を運ぶ商人ぐらいでほとんど人の移動もあまりない。ついでに言えば、季節も、風景も色の変化もあまりない。こういう物が無い変化のない一種凍結してしまったような所で暮らしが成り立っていると想像できるでしょうか。自然からの恵みも少ない、人の動きもない農村は、本当に時間が止まってしまったかと思うほど単調な暮らしぶりです。

食べる物、これはもう畑から取れる大麦と豆だけと言っても大げさではありません。一年中、大麦のうす焼きパンと豆のおかず。同じ麦や豆を煎ったりゆでたり、麦芽で酒を作ったり。祝いの日には鶏の肉など用意されようものなら、それこそ目を丸くしてしゃぶりつく子供たち。生活に必要な物、それはすべて、身のまわりにある、木、草、泥、ワラから作られている。調理を作るナベも食べ物を置く台も、穀物の貯蔵庫も。そして自分たちで作れず、お金を出して買わなければならない物は、使って使って使いきるまで使う。服は穴があけばつぎをする。どんどんつぎが増えて、どこが元の服の布かわからなくなろうが、修理して着

る。かさもつぎあてをする。陽がさと雨がさと両方が必要なので、一年中持ち歩く。つぎをあてたかさ。いよいよ使えないとなると、今度はかさの骨が毛糸を編む棒になったりする。くつはもちろん、長ぐつもつぎをあてる。長ぐつにつぎをあてても泥が浸み込んでくるのではないかと思うのだけれど、修理した長ぐつをはいた方がそれは何倍も良いのだ。修理し、それぞれが土になってしまうかと思うまで使いきる。“流行におどらされて”着れる物も流行遅れだからと着なくなるなんてことは、ちょっと想像できないことだろうと思う。自然が豊かで、そこから頂ける物 — 食べ物でも生活用具の材料でも — があれば、どんなに助けになるだろうかと思う。現実にはげ山ばかり。何も恵みを与えてくれない。毛布もなく、羊の皮と綿布で、日の出前には0℃をきることもある寒さの中、人々は暖かく眠っているだろうか。



近代的なアジスアベバの市街



時が止まってしまったようなマーシャ村

インドシナ難民

膠着状態を脱する

●西崎憲司記念技術学校

キャンプ内の15歳以上のカンプチア難民に対し、彼らの将来(カンプチアへの帰還、もしくは第三国定住後)の自立に役立つと思われる基礎的な技術を教える。従来からの單車、自動車、一気筒エンジン、溶接、基礎電気のコースに加え、今年度は竹細工、漁網、水汲みポンプの教科を設置する。

●バナニコム日本語学校

日本に定住するインドシナ難民に対し、日本語の指導、日本の文化・習慣を紹介し、彼らの抱く不安や懸念を取り除き、日本での生活が豊でかつ円滑に進められるように助ける。

この10年来膠着状態にあったカンプチア問題は、ベトナム軍の完全撤退と、ポル・ポト派の排除の問題をめぐるいまなお各国の思惑が飛び交い、完全合意をみるまでには至っていないが、1989年に入って解決へ向けてのいっそうの進展がみられる。

これを受けて、タイ・カンプチア国境の難民キャンプ、避難民キャンプにも少しずつ動きがでてきている。これまで、滞留する難民の解決方法としては第三国定住が主幹であった。政治的な背景から、難民を彼らの出て来た国へ帰すことがならず(ラオス難民に関しては少しずつ本国帰還も実施されてきた)、また、タイに留まることもならないため、国連機関、タイ政府そして受け入れ国となる西側諸国は、難民の第三国への定住をしゃにむに進めてきた。しかし、各国とも、定住受け入れに関して無条件というわけではなかったため、条件に合わない人たちは、キャンプで10年もの月日を過ごすことを余儀なくされ、本当に解決に向かって進んでいるのかと、この問題にかかわる人たちにつねに疑問を投げかけてきた。さらに難民キャンプには、あとから潜り込んだため、難民と認められていない人たちが数千人おり、国境近くにはこれまた難民と認められていない人た

ち(避難民)が各派に別れて25万人も滞留している。

しかし、昨年からの動向は、これらの人々の本国帰還の道をより現実性の高いものにしていく。7月にはタイ国における難民関係団体の連合体であるCCSDPTは本国帰還の可能性追求のため、JVC、OHI(Operation Handicap International)、CAMA(Christian and Missionary Alliance Organization)の3団体を代表とする第一次訪問団をプノンペンに送った。

JVCの運営するカオイダン難民キャンプの技術学校は、カオイダンに難民の本国帰還のためのトレーニングセンターにしようとする国連機関とタイ政府の構想の上で、重要な位置を占めようとしている。しかし、現実的には、この構想は今なお流動的であり、決定には時間がかかることが予想される。

そのため、難民と認知されていなかった滞留者がサイト2の隣接地に新設されたバンタットに移されて以後、新しい動きのないカオイダンのJVC技術学校では、生徒も指導者も激減し、運営の立て直し、あるいは運営の継続か否かを改めて問われている。

反対に、第三国定住決定者が一次的に滞在するバナニコム・キャンプでは、今までにない大量の難民の一次滞在にでんてこまいにされた一年であった。第三国定住政策を閉じ、本国帰還を推進しようとする今、日本政府が駆け込み的に大量の難民を受け入れようとしているからだ。この状態は今しばらく続きそうだと。

いずれにしても、もつれていたインドシナ難民問題の糸がはぐれかかったことは事実のようだ。インドシナ難民問題を契機として結成を見たJVCとしては、よりよい解決に向けてより精力的にかかわっていきたいと考えている。

(岩崎美佐子)



□ カンプチア難民が滞留されているキャンプ
■ UNHCRの保護下にあるキャンプ

ボート・ピープルのこの10年と今後

熊岡 路矢

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) の招待により、6月13日、14日のジュネーブでの第二回「インドシナ難民国際会議」に出席する機会を得ました。第一回の同会議は、陸路でのカンブチア難民の流出とベトナムからのボート・ピープルが大量に流出して大きな人道問題と国際問題となった10年前の1979年に行われました。

ここ数年間ラオスとカンブチアに関しては、難民流出は減っており、むしろ難民自主帰還の段階に入ろうとしているので、ここでは、ここ1～2年むしろ難民流出が著しく増えている、そして今回の国際会議で中心議題となったベトナムのボート・ピープルについての話します。

難民の受け入れ側では、特に香港政庁 / 英国政府の主張がはっきりしていました。香港はもともと人口密度が高く、今回の「天安門事件」の起こる以前から、中国本土からの入国者による人口圧力を受けていた所です。

ベトナムからのボートによる密出国者は、ベトナム南北統一後(1975年)、80年代始めまでは、近距離のタイ、マレーシア、フィリピンなどを目指していました。方向で言えば、南と東です。

タイ、マレーシアなどASEAN諸国の難民受け入れが厳しくなった80年代後半には、ボート・ピープルの流出も減少し、一時はこのままゼロに近付く方向で安定すると思われました。しかし87年からは一転してボート・ピープルは再び増え始め、しかもベトナム北部から出港し、北の方角を、香港などを目指すようになりました。今年3月末の香港の難民収容人口は2万人台、その後毎日500人以上のペースで到着し、国際会議の時点で5万人を越えています。到着後も難民の多くは、第三国定住の権利を否定され、混み合うキャンプの衛生条件も悪化する中で、いつ出られるという希望もないまま毎日を過ごしています。

10年間の活動とベトナム人との接触を通じ、併せて今回の会議を通して、個人的であります、

次のような見解を持つようになりました。

- (1) 1975年の南北ベトナム統一以降、80年代前半までのベトナム南部からのボート・ピープルについては、広い意味での政治難民と考えられうる。ただし当時個別の難民認定作業は行われなかった。
- (2) 米国など西側が、ベトナムからの難民を「共産主義体制の犠牲者」＝「自由への逃亡者」と持ち上げ、受け入れたこともあって、本来政治難民ではない人たちが大量に、職を、より良い経済生活を、教育を求めて非合法出国することになった。
- (3) 現在ベトナム北部から海へ出る人々は、香港 / 英国の厳しい難民政策を知り、はっきり日本の南部を目指すようになった。多くは経済的事由による難民である。
- (4) 民間としていえる事は、出国の理由はともあれ、海上での難民の救出・受け入れ保護の活動は続けられねばならない。また香港などの長期滞在者の第三国受け入れとベトナム本国からのODP(合法出国計画)の活発化も必要である。
- (5) しかし本質的に最も大切で必要なことは、ベトナム本国が社会的経済的に復興し、人々が一応安心して食べて生きて行けるような国になることである。直接的にはベトナム政府自体が政治的社会的改革を実施する責任がある。また海外諸国は、特にベトナムでの過去の戦争に責任ある国々はベトナム国内の復興・開発諸計画に協力する義務がある。
- (6) 本国の復興が今取りかかれたとしても、すぐの効果をもち得ない以上、過渡的にはベトナムからの移民と出稼ぎを国際的に合法化する措置が必要であらう。

ベトナム自身の努力と、日本もふくむ国連・国際社会の協力とによる経済社会の立て直しが着手され成功しない限り、ベトナムからの非合法でかつ危険を伴う船出は半永久的に続くであろう。

カンプチア 明るくなった人々

●サンタピエップ技術学校・ワークショップ

国際的な救援物資の輸送活動に携わるカンプチア人技術者に対し自動車・機械の技術訓練を行う。同時に国際機関、赤十字、民間団体の救援活動を技術面で補完する。また、孤児院の青少年に職業訓練の機会を提供し、彼らの自活を助ける。

●井戸掘り・給水活動

より多くのカンプチア人が「安心して飲める水」を主とする生活用水を得られるよう、井戸掘り・給水活動に必要な資材等を供給し、カンプチア人活動

者に技術面での助言を与え、特に地方都市や農村部での保健衛生環境の改善を助ける。

●母子保健活動

乳幼児が病気に応じた適切な治療と予防接種を受け、母親自身が子供の発育を観察し、健康を管理するようにする。また栄養不良の乳幼児・子供のために補助栄養食の給食、および指導をする。

最も力を入れる活動としては、健康、衛生、栄養に関する母親教育で、同時に郡病院、保健所スタッフ、村レベルの保健ワーカー教育訓練を行う。

カンプチアをめぐる情勢はこの1～2年で本当に大きく変わった。87年7月の頃は、携わっているプログラムへの希望とか抱負といったものはあったが、ベトナム軍撤退とボル・ポト派の処遇の二つの問題を軸とする「カンプチア問題」は全くの膠着状態で、平和の回復に関しては手掛かりも感じられない、国民にとっても救援活動者にとっても希望のない時期だった。

それが1987年末のシハヌーク/フンセン会談を皮切りに、2回にわたるカンプチア四派と関係国との会談、国連総会などの場でカンプチア平和のための準備が着々と進んでいる。もちろんボル・ポト派の復権も含め、解決しなければならない問題は山積みしているが、平和の日がそう遠くないことを実感している。

政治のことはさておき、国内の普通の人達の生活を見ても、ここ2～3年の変化は目覚ましく思う。とにかく全体として人々の顔色が良くなり、表情と服装もとても明るくなったし、街の商業活動などでも動きと活気を感じる。85～86年位までは、街の様子も人の表情もまだ暗いというか固い印象だった。

昨年6月の憲法の一部修正（外国資本との合併、資本参加を認めるようになった）以来、かつて海外に散った中国系カンプチア人実業家などが帰国し、その投資などにより、ホテル、食堂、酒屋等商店などの再建、新設などが相次ぎ、賑やかにあるいは派手派手しくなってきた。私見だが、カンプチアは現ヘン・サムリン政権のままで市場経営＝資本主義への道を既に歩んでいるように思う。ましてシハヌーク派やソン・サン派が加わる新連合政府ができた暁には、社会主義の要素はほぼ完全に消えるのではな

いだろうか？ 平和、非同盟、中立、民主、自主独立と対立する二派の方針は一致している。

思えば1985年、活動を支える資金もほとんどなく、また現地カンプチアでは82年以來の簗田氏のOXFAMでの活躍以外、ほかに実績も無い状態から活動をスタートさせて行った時は、約束を実行出来るかどうか、本当に不安だった。当初の苦しい時期を支えて下さった3～4団体から、87年、88年を通して20数団体と200人以上の個人支援者が新たに支援に加わって下さり、現地で必要とされている技術訓練、母子保健、井戸掘り・給水のプログラムを進めて来る事が出来た。ここまでやって来られた事について、日本側の支援者の皆さん、カンプチアと一緒に働いてきた人達、JVCタイのスタッフの側面援助に、心から感謝したい気持ちだ。

この間3年間、現場の活動ではカンプチア在住6年の簗田健一さん・玲子さんと、馬清さんが中心となり技術学校、井戸掘り・給水活動を展開し、東京では事業担当として古西勇さんが、国内の市民・支援団体との連絡と国内活動、勉強会、『NGOが見たカンプチア』の翻訳出版を担った。母子保健の活動は調査段階のマリー・キャマルさんから実施段階の釘村千夜子さんと本田徹さんへ引き継がれ、さらに現在は杉江美子さんが現地入りしている。

カンプチアの平和回復に関しても、私達の救援活動にも逆風であった時期が一応終わり、1～2年以内にカンプチアの政治社会経済、そして彼の国と日本・世界との関係も全く新しい段階を迎えるに違いない。いま大きな峰をひとつ越えてホッとして一息入れたい気持ちと、新たな局面に向かう知恵を模索する気持ちが同居している。（熊岡）

婦長さんの体重

釘村 千夜子

気合いを入れて「イエーイ」。

カンプチア語で助産婦のことです。おばあさんという意味もあるので、48歳の婦長さんにとって今ではぴったりの呼ばれ方だと思います。彼女は、はたちの時から「イエーイ」と呼ばれていました。それだけに、赤ちゃんのとり上げ方のうまさは、隣の県にまで知れわたっています。ふた子やさか子も平気です。

プノンペン郡ラインセンター（母子保健所）が設立されるずっと前から、トゥイ・カッ婦長は群病院の分娩室で仕事をしていました。ボル・ポト以後すぐといえますから、10年になります。トゥイ（小さな）という彼女の名前のとおり、体格は小さいですが、働きの大きさは誰もが認めています。これまで彼女は、内戦で失った血を再生するかのよう、新しい生命の誕生に手を貸し続けています。自宅に帰るのは月に数えるほどで、息子さんたちの方から彼女に会いに来ることがあります。職場が生活の場です。

私が「婦長さん、やせるはずよね」というと、「この10年間心身共に休まる暇がなく、体重は減る一方。ボル・ポト時代が一番太っていたのよ」とおかしなことをいうので、もう一度聞き直してみました。

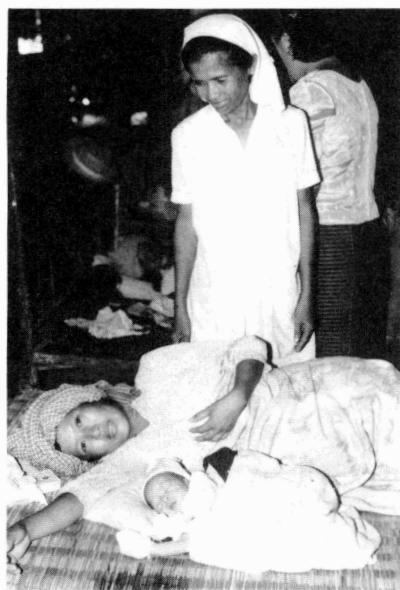
約3年8カ月にも及ぶ、ボル・ポト政権下での強制労働はつらかった。しかし一定量しかなかった米の配給は、はじめたくさん的人数で食べていたので足りなかったが、2年目、3年目と年を追うごとに殺される人が多くなり、その分米が余り、婦長さんたちは以前よりたくさんのごはんを口にできるようになったのだそうです。

初めのころは、「いつ自分が殺されるか」という恐怖でいっぱいでしたが、毎日繰り返される虐殺を黙視せざるを得なかった数年を経てからは、「死ぬときゃ死ぬさ」と思うようになり、とても気が楽になったそうです。それからは、極度にやせていた体もだんだん太ってきて、ボル・ポト時代が終わりを告げるころは、ふっくらとなってきたと話します。ほかのスタッフもあの時の話題になると、力の入った声、目つき、顔つきで、口々に自分の体験を私に語ってくれました。

「毎日夜明け前から強制労働に出て、夜の11時ごろまで働きました。食事は重湯に飯粒が浮いたような粥だけだったので、いつもお腹がすいていました。ある日、作業中に田んぼでつかまえたカニがハサミでお腹の肉をはさんだんです。痛くても声を出すとバレて命が危ないし、ほんとに痛かった」とか、「私はプノンベン街で生まれ育ったから、地方に移され、強制労働で田んぼの稲を見た時、それが何だかわからなかったの、そばにいたお母さんにこれは何かと尋ねました。今では村に住み、田植えもうまいし、農業のことはできます」と得意そうです。彼女のお姉さんはオーストラリアに定住しており、時々送金があるといえます。そのお金で10年前に亡くなった両親の法事をした時には、およそ300人の村びとが集まりました。村の三つのお寺から一人ずつお坊さんと呼ばいお経をあげてもらったせいか、私は彼女にどこかホッとしたものを感じています。

彼女たちは語りながら涙ぐみ、鳥肌立った両腕を抱きかかえてしまう人もあり、「昼寝を続けようね」と、話をやめたことがありました。そして目がさめたら私が知っているいつものみんなにもどって、村のお母さんと子供を相手に、親類同士のような仕事ぶりと生活が続きます。

「婦長さん、なかなか太れないね」



産婦を見舞うトゥイ・カッさん

タイ

村の再生をめざして

●奨学金活動

バンコク市内のスラムの小中学生 200 人に奨学金を支給。

●クロントイ図書館

図書活動のほか、求人広告の案内、講演会など地域活動を行う。

●スラムの生活改善

立ち退きが予想されるスラムの生活改善を行う。

●農村開発

多角農業、混合植林などによって食料の自給できる村づくりをめざす。

これまで、タイの農民の生活は、村を囲む森と深く結びついて営まれてきた。建築材料、灌漑せきの材料、家畜の飼料、たきぎ、副食物としての竹の子やきのこ、鳥獣、赤アリの巣、葉草、樹脂、繭など、実に多くを地域の森から得てきた。農民は森にいる神をあがめ、森を大切にしていた。

そして今、農民の生活を支えてきた森がほとんど消滅してしまい、伝統的な自給自足生活は営めなくなった。森林の減少には、20世紀にはじまったイギリスのチーク伐採を皮切りに、人口増加による農地の拡大、大型ダム建設などさまざまな原因が考えられるとしても、森林の消滅を決定的にしたのは、外貨獲得目的で導入された換金作物、キャッサバ、トウモロコシ、ゴム、ユーカリなどの栽培地拡大のための伐採である。

この1年半、JVCはタイ東北部ブリラム県において農村開発にかかわってきた。調査を含めれば、さらにその数年前から農村に目を向けてきた。この間、農民の置かれている状況はますます困難になった。降雨の減少による米の収穫量の減少、換金作物の連作による土地の疲弊や借金の問題も大きいが、森の消滅による副食物の減少はとくに子供の栄養失調や疾病を増加させている。

干ばつは種々の病気を誘発する。1987年、蚊による感染症であるデング熱が大流行し、農村部で300人以上の子供たちが死んだ。通常でも乾期は6カ月から7カ月続き、干ばつの年は実に9カ月以上も続くため、食べるものが底をつく。貧しい家では、副食物を買うことができず、ご飯に塩だけ、あるいは塩だけでは食べられないので、塩となけなしのお金で買った化学調味料をかけた食事を数カ月続けている。このため、外見はただ痩せているくらいにしか見えない子供の身体は、内部で深く傷つき、抵抗力を失っているため、高熱が続いたりすると、あっけ

なく死んでしまうのだ。

JVCが目指しているのは、まず現金収入を得ようとする前に、自分が食べられ、健康な身体を維持できる農業である。米を作り、副食物は森からとってくるという生活はすでに永久に失われた。それならば、かつての森を自分の水田のなかに再現できないだろうか。それがこの複合経営農業の試みのきっかけである。私たちは農村開発にかかわるための準備のため、各地の篤農家、NGOを訪ねたが、東北部では複合経営農業しかないという結論に達した。現在、JVC自らM村の小学校の学校菜園において学校給食自給を目標に複合経営農業を実践するとともに、M村やその周辺の村の農民たちを複合経営農業を実施している農家の見学に誘い、彼ら自身に考える機会を用意している。

すでにM村の5軒の農家が、雨期に先駆けて、複合経営農業の手始めである溜め池を彼らの田んぼの中に掘った。6月には、フクロ草の庭先栽培の見学会も行った。また、生態系を取り戻そうと、本格的な雨期の到来を前に、子供、先生、父母たちといっしょに、小学校の周りを中心に、果樹、建築用材など、およそ700本の木の苗を植林した。

M村からおおよそ10キロ離れたS村では、精力的な村長の指導力もあって、村ぐるみ複合経営農業を推進しており、近隣11カ村にも波及しつつある。JVCは、このS村の魚の孵化場建設に協力した。S村では、乾期が厳しいこの村で、普通の池で十分に稚魚を孵化することが難しいため、これまで稚魚を外から購入してきた。今後、村の孵化場で稚魚を孵化できるようにになれば、農民はより自立できる。

今、M村では、どうやって複合経営農業を推進しようかという話題が、農民のあいだで日常的に話されるようになった。干からびたM村が緑も心も豊かな村になることは夢ではない。(岩崎み)

ラオス 難民を出さない国づくりを

●女性生活改善指導員の養成

母子保健、栄養、育児、農業の分野で女性の生活改善指導員を養成し、難民を出さないための村づくりをする。訓練生は4カ月間の研修の後、出身の村に帰って学んだ知識を村人に広める。

インドシナ難民問題への取り組みからはじまったJVCの活動は、多くの議論と試行錯誤をへて、緊急対処のみでなく根元的解決につながる活動に、また、難民の流入国や再定住国のみにおいてではなく難民の母国においての活動と、幅を広げてきた。現在、タイ国内でインドシナ難民にかかわっている団体は数多くあるものの、カンブチア、ラオス両国内でも活動しているのは、JVCのほかにはOHI（Operation Handicap International、フランス）があるのみである。

1975年、プノンペン、サイゴンの陥落に続いて、ラオス人民民主共和国が無血で成立した。しかし、新生ラオスの建設は、人材不足のため困難を極めた。内戦時、何万人もが難を逃れてタイなどに合法的に移住してしまっていた。共和国成立後は、まず反対勢力だった人たちが、続いて村がさびれて食べられなくなった人たちが難民となって、およそ30万人も出ていったのである。

JVCは、設立時よりラオス難民のプログラムにかかわり、帰還難民の定住、ラオス国内の村づくりこそが難民問題の解決につながると考えてきた。1987年6月、星野事務局長（当時）とラオス担当の谷山がラオス政府と国連開発機構（UNDP）が主催したラオスの援助に関する国際円卓会議に招待され、ラオス国内での活動の足がかりを得た。最初の活動として結実したのは、ラオス婦人連合と共同の、女性生活改善指導員養成プログラムである。

プログラムの内容は、母子保健、栄養、育児、農業などの分野で、村の女性の生活改善を指導する指導員を養成するものである。このプログラムの特徴は、養成内容をより充実させ具体的にするため、指導員たちが教科終了後、村を巡回しているあいだにぶつかった問題や疑問を、3カ月後に再度養成所に持って帰ってお互いに議論できるようカリキュラムを組んだことである。

難民を出さない国づくりをするためには、食べられる村、健康を保証できる村づくりが基本である。限られた財源のなかで長期的な展望を持って生活向上を図るには、村で活動できる人材を養成することが必要である。

さて、1975年以後、社会主義政策をとってきたラオスは、人材不足に加えて西側諸国からの経済援助が制限されていたため、経済が行き詰まってしまった。1987年当時、タイがラオスから買っていた水力発電による電気は、タイの電力消費量のわずか2%であったにもかかわらず、ラオスにとってはこれが全外貨獲得高の80%を占めていたということをも、経済の逼迫度が伺えよう。

このため、国内が安定してきた1988年から、自由化へと政策転換しつつある。そして今、タイ、NIES諸国、日本、欧米などの物と金が滝のように流れ込み、ラオスの人たちの生活を直撃しはじめた。食糧の自給もままならないというのに、首都ヴィエンチャンの近郊では輸出用の換金作物として、カンジュナツ、キャッサバ、タバコなどの栽培がはじまった。タイや日本からは木材に熱い視線が向けられており、電力と木材しか外貨獲得品目を持たないラオスでは、環境破壊を恐れ、ためらいつつも、乱伐への規制を徹底できないでいる。

そのような状況のなか、JVCはラオスのもっている伝統医療、手織物、自然との共存の仕方、相互扶助のシステムなどの豊かさを大切にしながら、彼らの求めている食と健康における安全性を達成することをめざしたい。

なお、JVCが希望しているラオス難民帰還のためのプログラムは、帰還自体がなかなか進まないためいまだに進展していない。（岩崎み）



生活指導員養成プロジェクトの合意書にサインする

日本国内

多様化する問題

●定住難民支援

日本に定住したインドシナ難民が地域に根ざし、経済的、精神的に自立した生活をしていくように支援する。

具体的な活動としては、日本語指導、生活相談の

T & E ののバックナンバーを調べてみると、1982年6月20日発行の第16号に次のような呼びかけで始まる記事があった。

「ちょっと違う家庭教師、してみませんか。神奈川県横浜、海老名、綾瀬市に住む6家族のカンボジア人に、日本語の家庭教師ボランティアを募集しています。週一回の家庭訪問ができ、明朗で、根気よく物事を教えることのできる方いらっしゃいませんか。年齢・性別・資格は問いません（以下略）」。

有志で始まったこの活動も、翌年には「日本語家庭教師プロジェクト」となり、やがて「定住難民プロジェクト」となって7年が経過した。この7年の間定住者数も3倍以上になり、また日本語学習の援助に当たる市民グループもずいぶん増えてきた。それと同時に大きく変化してきたのは定住難民の抱える問題の質である。

当初の「日本語家庭教師プロジェクト」という名にも現れているように、定住者の最大の悩みは言葉の問題であった。日本語がうまくできないため、自分が意識して高めようとしながざり社会生活のあらゆるコミュニケーションの場面から遠ざかっていく。

しかし問題の質はこの7年間のうちでかなり深刻化してしまった。つまり民族的アイデンティティーの混乱と変容といった心の問題がシリアスになってきたのである。それは若い世代を中心に確実に進行しており、たとえば子どもたちが母国語を話せないように学ぶことさえ拒絶する、日本語でのコミュニケーションがおぼつかない親を見下す、勉強の遅れや不安定な家庭環境などから非行化する、母国の衣装や食べ物などをいやがるといった話はよく耳にする。親のあきらめをしり目に、子供たちはどんどん日本の主流社会の波に取り込まれ、ゆらゆらと揺れているというわけである。もちろんその「取り込み」自体を親子共々もっと楽観的に肯定的に考えていて、あえて「日本人」化する定住者もいるかもしれない

ための家庭訪問、定住者の母国であるカンボチアやラオスの国々を知るための学習会などを行っている。また昨年度はボランティア活動のためのハンドブックを作成した。

が。

いずれにしろ異文化圏における少数派グループがそこに根を張って生活しはじめ、世代交代を繰り返していく過程でたぶんたくさんの民族性を失っていくであろう。このような状況の中で少数派も多数派も相互に調和のとれた民族性の存続が望まれているのではないと思う。定住難民プロジェクトでも特にこの視点から、定住者の民族文化の継承活動の支援に力を入れてきている。具体的にはカンボチアの伝統民族舞踊の発表の機会を提供したり、JVCプノンペンから送られてくるカンボチアの新聞を定住者に読んでもらえるように便宜をはかっている（新聞は今のところ町田市のカンボチア料理店アンコール・トムとJVC神奈川に置いてある）。

またもう一方のアプローチとして日本人に対する開発教育活動を日常的に進めていく必要を痛感している。つまりこの定住難民の問題を切口にして、日本人々と第三世界との関わりを学ぶ機会を提供していくと同時に、インドシナ難民のみならず、ほかのすべての少数派グループが「文化的取り込み」もなく多元的に機能できる社会づくりに貢献していけるのではないと思うのである。またそうした社会（人）づくりの過程が、逆に第三世界で起こっている諸々の矛盾にプラスの影響を与えていくであろう。

たしかに今まで続けてきた日本語学習を中心とする家庭訪問活動は評価されるべきだが、緊急状態をほとんど脱してきた今、前述してきた民族的アイデンティティーの問題を定住難民プロジェクトのテーマにしていくことが必要だと思う。それはインドシナ三国の人々と日本人の問題のみならず、日本国内のすべての民族的グループ、ひいては世界の民族的グループの問題でもある。そして肝心なのはそうしたビジョンを持って、今具体的に定住難民プロジェクトとして何をしていくかである。今年もたくさんの試行錯誤（トライアル・アンド・エラー）が展開されることであろう。（小野）

お手伝いを脱して、新しいプロジェクトを

岡村 達司

私がJVC神奈川オフィスに顔を出すようになって、早くも8カ月たちました。去年の今頃のNGO活動とは縁もゆかりもないごく平凡なサラリーマンだった自分を考えると、塾の講師をやりながら空いた時間に神奈川オフィスへ通う現在の生活との落差に我ながら驚いています。

受験屋という仕事の都合上、当初は午前中しか活動に参加することができませんでした。そして当初もっとも悩んだのもこのことでした。なぜならば、この世界はゴキブリのような人々が多く、皆夕方過ぎ頃からゾロゾロとわき出て来て、夜盛り上がっているからです。午前中しか知らない私はそれがわからなくて、こういうことに関わっている人はやはり気難しい人が多いのかと考えていました。今から思えばただ起きたばかりで皆不機嫌なだけだったような気がしてなりません。土曜日を一日使えるようになった最近では、がぜん活動の幅も広がりはりきっているのですが、やっぱり毎日昼過ぎまでの時間をもっと有効に使いたいという気持ちに変わりはありません。いっしょにラジオ体操をやりようとは言い出しませんが、他のゴキブリプロジェクトに対抗すべく、“朝日の如くさわやかな”プロジェクトを始めましょう。賛同者は神奈川オフィスまで連絡されたし。

ところで、JVCの活動の関わり方について自分自身最近曲がり角にきているなと感じています。これまで、ワープロ入力や印刷、あて名書き等事務所の作業を言われるままに手伝ってきました。一方JVC神奈川オフィスのある魅力あふれるKISコーナー（神奈川県国際交流協会の一隅）に集まる様々なNGO活動に携わる人との出会いや、KISで催される様々のイベントへの参加を通して、少しずつですが自分の関心や、やりたいことがはっきりしてきたのも事実です。その結果こんなことがやってみたい、あんなことも実践したいという

ようなことがいろいろ頭に浮かぶようになりまして。もうそろそろこれまでのお手伝いにプラスして、より主体的な行動を展開していきたいと考えています。

私がJVCの活動に参加しはじめたのは、アジア世界に魅せられ、アジアと何らかの形で関わっていきたいという何とも素朴な理由からでした。そうした意味では定住難民プロジェクトのある神奈川での活動は、大変勉強にもなりやりのあるものです。悲しいかな、日本人の他のアジアの人々への差別感情を考えると定住難民の将来も決して明るいものとは思われません。私が特に関心があるのは定住者の人権問題で、この視点から定住者の生活を長い時間をかけて追っていく作業を続けたいと考えています。人権というのは人間にとって最も基本的なものであるだけに、それが踏みじられた時とても根の深い問題となります。それは日本における他のマイノリティーの例でも明らかです。当面は地道に資料を集めたり、定住者と関わりながら問題の糸口の探っていきたいと思っています。

最後にこれまで参加してきた活動やイベントについて。3月、横浜市内の老人ホームで行われた定住難民との親善パーティーのお手伝い。4月、KIS主催のドラマ・ワークショップに参加。これは私にとって新鮮かつ大変興味深いものでした。どんな地域でも気楽に楽しく実践できる開発教育の極めて有効な手法です。将来海外や国内各地で、ぜひやってみたいです。5月、グリーンウォークに参加。そして神奈川オフィスで行われた種々のミーティングに出席。あとは定住難民の機関誌や作文集の編集等々。何かやらなければ、と思いながらも休日は死んだように寝ていた前生活から一転して、JVC神奈川をベースに軽快なフットワークをとり戻した8カ月でした。

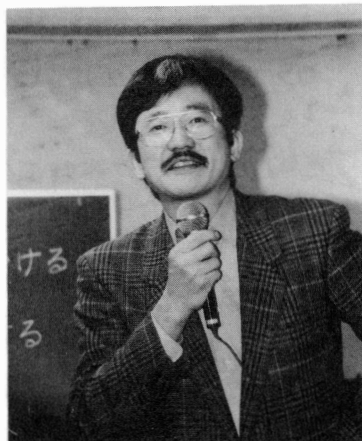


第7回会員総会

6月10～11日

早稲田奉仕園 セミナーハウス

新事務局長に林 達雄さん



新事務局長に選ばれた
林達雄さん

JVC第7回会員総会等が6月10日(土)、11日(日)の2日間にわたり早稲田奉仕園セミナーハウスにおいて行われた。10日の午後と11日の午前中はフリートークで、第三世界へのかかわり方、事務局への要望などをざくばらんに語りあったり、ゲームなどで楽しい時を過ごした。総会は11日午後1時半から4時半までJVCの基本方針や今年度の予算について意見がとびかった。また役員の改選が行われ、設立以来JVCをひばってきた星野昌子に代わり、林達雄が新事務局長に選ばれた。

JVCの基本方針は、昨年の総会で「活動の指針がほしい」という会員の要望に対し執行委員会が原案を作成したものである。総会場で若干の手直しの後採択された。またODA(政府開発援助)からの事業補助金については、補助金を受けた時点で補正予算を組み、機関誌を通じて会員各位に通知することが決まった。

1988年度活動報告 ———— 鴫田三芳

昨年度の活動についていくつかの特徴が上げられる。①募金額は前年度とほとんど変わらないが、支援者のすその広がってきた。チャリティー・カレンダー、クリスマス募金など新しい試みの成果もあった。②JOCVの経験者や家族持ちのスタッフなど腰を落ちつけて活動するスタッフが海外に増えた。また、日本国内では各種イベントの協力者が増え、国内活動が活発化している。③カンブチア和平の動きとともに、難民帰還のためのプログラムの準備を進めている。④カンブチアの母子保健センター、ラオスの農村生活改善指導員養成センターの開設など、新しいプログラムも軌道に乗った。⑤'87～'88年のエチオピアの干ばつに際し、国連やNGOが連携プレーを取り、飢餓を未然に防ぐことができた。

1988年度の活動報告、決算報告に引き続き役員の改選が行われた。執行委員の選出に関しては前の執

行委員会から委嘱された推進委員会(檜崎知行、佐久間典子、谷山博史)から以下14名の名前が挙げられ、全員が承認された。なお設立以来事務局長を務めていた星野昌子に代わり林達雄が事務局長に選ばれた。また代表は岩崎駿介が再選され、新たに熊岡路矢が副代表に選ばれた。

<執行委員>

秋山忠正(協力隊を育てる会常任理事)

伊従直子(カトリック修道女)

岩崎駿介(JVC代表、筑波大学助教授)

岡本 厚(岩波書店『世界』編集部)

熊岡路矢(JVC副代表、カンブチア担当)

黒田洋一(熱帯林行動ネットワーク事務局長)

柴田久史(早稲田大学学生)

多賀秀敏(新潟大学教授)

中田正一(風の学校主宰)

林 達雄(JVC事務局長)

デイブ・バスカビル

(シーコア・インターナショナル副社長)

星野昌子(JVC特別顧問)

本田 徹(SHARE代表、内科医)

室 靖(東和大学教授)

<監査委員>

武田昌邦(弁護士)

鷺津邦男(モラロジー研究所経理部副部長)

昨年の総会で会員から「JVCの活動の指針を提示してほしい」との声があり、それを受けた執行委員会は、その作成を小委員会(室 靖、岩崎駿介、前川昌代)に委嘱し、それをもとに議論を重ねた。原案についてはすでに本誌の89号に掲載されているので、それをもとに岩崎から説明があった。その際に会場から、I-8「ボランティア」団体としてのJVCの項の中に「JVCをボランティア団体であるからと

いて、これを『無料奉仕』的団体であるとのみ規定することは間違っている。(中略) JVCは決して『自己満足のための団体』ではない」という表現は他団体、特に無料奉仕で活動している団体を見下していないか」という意見があった。討議した結果、不適当と思われる5行「ときどき～『自己満足のための団体』ではない」を削除し、執行委員会から提案されたJVCの基本方針案は承認された。

1989年度活動計画——林 達雄

昨年度は環境問題、人権問題という視点からエチオピアとカンブチアのプログラムに力を入れた。環境問題は地球的なテーマとして今後も重要視していく。'89年度はエチオピア、ソマリアに加えてタイでも環境問題に取り組む。JVCの個々のプロジェクトを通してこれらの問題を日本の人々に訴えていきたい。

ODA資金に関してはJVCとしては積極的に活用していきたいと思っている。ただし予算に占めるODA資金の割合は20%の制限を設ける。

また、従来から進めてきた法人化への取り組みは今年も続けていく。

<質疑応答>

予算説明のあと質疑応答に入り、ODA資金に関して活発な議論が展開された。

太田 徹 JVCという標記をこのまま使うのか。海外ではJIVCといわれることもあるが。

室 靖 JVCという名前はあまりにも有名になった。名前が変わっても以前の略称をそのまま使っている国連機関もある。JVCもこのままでいいのではないか。

— この名称についてはいろいろ批判もある。将来的にはJIVCではなく根本的に変えたいと思う。

(星野)



白石尚子 広報費の中にイベントのための予算が組みこまれているのか。イベントの準備がボランティアの持ち出しになってしまうこともある。

鷺津邦男 JVCのプロジェクトとして計上するとそれは税金の対象になる。第三者が寄付するという形にした方がいい。

— カレンダーの場合昨年の収益の中から活動費は残しておいた。そのようにしたらどうか。(岩崎み)

— カレンダー、イベントに関しては鷺津氏の提案を受け入れ、広報費の中に原則的には入れない。(加藤)

室 靖 今年度の予算の収入源の中で大事なものが抜けている。ODAの事業補助金を受けるなら書き加えるべきだ。

— 補助金がどの程度入るかどうかは不確定だ。

JVCは3800万円申請しようと思っているが。(岩崎)

「ここでいったん事業補助金の申請額に応じて各プロジェクトの予算案の修正が行われた。」

秋山忠正 ODAの使い方のずさんなところまで政府のマネをしないように。補助金の降りていない今の段階でODAの項目を入れるのはどうか。

鷺津邦男 今から予算に組み入れなくてもいいと思う。まだ未知の部分も多いので補助金を得た段階で決算処理したらよい。

檜崎知行 タイの地域開発の場合、600万円の予算がODA資金を得ると1600万円にもなる。どうして2.5倍にもなるのか。

— ODA資金が入ったら親に虐げられた子供を收容し学校教育を行っているグループを支援する。学校、宿舍の建設費用に使いたい。JVCの従来の活動に変化はない。(岩崎み)

— カンブチアの場合も病院の建設費用である。もしODA資金が入らなければ別の方法で考える。(岩崎)

議長 事務局はODA資金を受けた場合、修正した予算書を作成し、T & E誌上で報告してはどうか。

以上のような議論を経て、ODA資金に関してはJVCが得ることが決定してから事務局は予算書、計画書の修正案を作成する、その修正案が執行委員会の承認を得てから本誌の誌上にその概略を掲載するという手続きについて満場一致で承認された。なおラオスの予算案はすでにODA資金を見込んでいますが、ODA資金が入らなくても集めるということで事務局の提出した予算書は修正されずこのまま承認された。

総会と総会前夜祭

・面白くてためになる「山口さんのゲーム」

総会前日の催物のメイン会場の早稲田奉仕園についたときには、開会予定時間を30分ほど過ぎていました。広めの教室のような部屋にいくと、20人あまりの参加者が二人組になって、ひそひそ相手の耳元にささやいています。しばらく部屋の隅で見守っていると、これがなんと「他己紹介」。今をさる十年前、まだ大学生だったころに、私もやったことがあります。担当のJVC神奈川の山口さんによると「短い時間で自分のことを相手に伝える、相手の話したことを簡潔にまとめる、この2点でコミュニケーションのいい勉強になる」のだそうです。

私がやったのは仲間内のお遊びですが、初めて会った人同士がするそれは、なかなか意義がありそうです。開発教育の講師の役になったとき、あるいはパーティに出席したときなどのために、知らない人と話すのが苦手な日本人には、いいトレーニングになりそうです。

山口さんはこのほか二つのゲームを教えてくださいました。長くなるのですが、面白かったので紹介しておきましょう。

ひとつは「アジアゲーム」です。これは十人くらいの人間が集まって手を前に差し出し、勝手に手を握り合います。そのあとそのまま手を離さないで解きほぐすというものです（これは、複雑な問題を解決するには全員の協力と広い視野が必要という教訓を得るためのものだそうですが、男女混合でやればただのゲームとしても十分楽しい）。

もうひとつは「非暴力トレーニング」です。これは二人でひと組になり、一分間、片方はただひたすら大声をはりあげ、片方はそれに耐えるだけというもの。片方が専制者、他方が非服従者という設定です。やってみてそのあと感想をそれぞれが話したのですが、いろいろ感じるところがあるようです。

・印象的だった二人の女性の話

ゲームのあと、いろいろ話をしたり、岩崎代表の南北問題に関する「講義」を聞いたりしたのですが、

岩崎美佐子さんと星野さんの話が印象的でした。両方を紹介したいのですが、紙幅の関係で岩崎さんの方だけ紹介します（星野さんは今年から全国行脚に精を出すということですから、地方の方もぜひ実物を見ながら聞いてみてください。その夜、あるいは翌日の総会などでも発揮されたのですが、話題が面白いいうえに、話術がしっかりしている星野さんの話は、時間を割いて聞くだけの価値はあります）。

さて、岩崎さんの話です。大学院の修士論文を書くため、ラオス国境に近いナンという町に三度訪れました。

一度は80年代の初めに。桃源郷はかくや、と思わせるほど緑の山々に囲まれた美しい町だったそうです。古老によるとタイ族の故地、中国・雲南省の都のようだとか……。

それが86年に行ったときには、山の木がドンドン伐られ、トウモロコシが植えられていたそうです。つまり、自給自足時代には副食、燃料、建材の補給地であった森を焼き捨て、貨幣経済に突入したのです（ホンダのオートバイ欲しい、ビクターのラジカセ欲しい……）。

さらに今年の春訪れたときには、畑は山頂に及び、放棄された畑が熱帯の豪雨にうたれ、剥き出しの土地になって広がっていたといえます。岩崎さんがなぜと聞くと、「木を伐ればこうなるというのはわかっている。しかし、一度、自給自足生活を捨てたからには、荒れて収量の減った古い畑を離れ、新しい畑を開墾し続けるしかない」と答えたとか。

このタイの僻地でとれたトウモロコシは、日本に送られ豚の餌になっているということです。

また、ラオス担当の谷山さんによれば、タイの木材業者は自国の森林を切り尽くしただけでなく、ラオスの森に襲いかかっているということです。彼は森林保護の名のもとに山地を追い出された少数民族と面会しました。

・酒も話も弾んだ「前夜祭」

近くの食堂で夕食を摂ったあと、遠来の参加者と



開発教育の教材を使ってゲームの意味を説明する山口さん(左)と、他己紹介する参加者(右)

東京事務所のスタッフが泊まる宿舎に移りました。出席者は昼間よりいちだんと増えた感じで、かなり広い部屋なのに隣の人と膝が着くほどです。夜が更けるにしたがって参加者はますます増え、ついには部屋の外周だけでは納まらなくなって、島のように中央部に進出するグループさえでした。

買い出しにいったグループが飲んべえだったせいとか、白、ロゼのワイン、各種ビールに日本酒と飲み物は各種。ツマミもなかなかのものが揃い、酒が進みます。結局、途中でもう一度、買いたしましたが、それをふくめほとんどがなくなってしまいました。

どんな話があったかというところ……まず、この日最初から出席していれば、4回目くらいになる自己紹介をして、北は山形、西は広島から集まった参加者の地方での活動実態を話して…、実はレポーター(AG)自身が卒先して飲んで酔っ払ったのでよく覚えていないのです。スイマセン。とにかく楽しい話とためになる話があったのは事実です。アッ「概して言うとな日本の女性は魅力的でない」「男性だって同じ……」なんて言う話をした記憶がありますから率直な雰囲気でも合ったのでしょう。

消灯の10時を大幅にこえたところで楽しかった会はお開き。その後は泊まる部屋ごとに話が続いたことでしょう。東京の片隅にすむAGは近くのお店でもう少しだけ飲み物をとって帰宅。

・JVCの時代を区切る総会ではあったが……

翌日は午前中から、スライドを使って学習会がありましたが、私は欠席。理由は読者のご賢察のとおりです。

さて、総会はやはり少し広めの教室という感じの

部屋が会場。参加者は40名弱で、昨夜のほう部屋が狭かった分だけ、熱気があったのでは……。そういえば、昨夜盛大に飲んでいたので顔をみせない人が何人かいます。

黒板には「広く世界をうれい、深く地域に語りかける 深く地域を考え、広く世界に行動する」とカッコいい言葉が書いてありました。その前で行なわれた議事は、残念ながら、それほど白熱という感じではありませんでした。なにしろ、JVCの全活動の決算を承認し、予算を審議し、人事を決定するという盛りだくさんのメニューですから、仕方ないことでしょう。

その中で目立った議論はJVCにも与えられると予想されるODA(政府開発援助)資金の対策の問題でした。ODAによる補助金に頼ることなく計画を立て、しかも、それが活用できるようになれば、できるかぎり有効に使おうという事務局、および執行部の方針は立派、と言っていると思います。

詳しい議題や人事などはこの前のページをみていただければわかることですが、今度の総会はJVCの時代を区切るものでした。星野さんから林さんへの事務局長のバトンタッチ、熊岡さんの副代表就任、JVCの基本文書の作成……など。緊急救援から開発援助へと活動の性格をかえつつあるJVCが、名実ともに第2世代に入った記念すべき総会でした。その割には、出席者数も、議事の内容もほんの少し淋しかったような気がするの、私だけでしょうか……。総会で本質的な問題について建設的な議論が戦わされる日がくれば日本も変わるかもしれない、そんなことを思いました。

サードワールド・NOW

アフリカといえば干ばつと飢餓、アジアといえば貧困、もしくは自然の豊かさ。知らず知らずのうちに画一的なイメージでそれぞれの国をとらえてしまうことがあります。でもほんとうはいろんな国でいろんな人がそれなりに楽しみながら暮らしています。今月はそんな人々の暮らしを御紹介します。

エチオピア——お化粧は念入りに

美男、美女で知られるエチオピア。何もなくても十分に美しく、道ゆく人を見るだけでもけっして退屈はしないのだが、流行の髪型を結いあげ、すばらしいプロポーションでアジスアベバの街をかつ歩するファッショナブルな女性たちに、男性諸氏の目は右に左にと忙しく動きまわることになる。

一方、こちらマーシャ村。アクセサリや化粧品や商品として出まわっている都市部と違い、週に一度のマーケットでも、村の小さな雑貨屋でも、流行とかファッションとかに関係のありそうなものはなかなか見ることはできないが、よく観察していると、女性が美しくあるための努力はけっしてアジスアベバの女性にひけをとるものではない。

まず目につくのはお化粧。化粧といっても、毎晩クレンジングクリームで落とすような中途半端なものではない。生涯とれない入れ墨をデコレーションと称して刻みつけてしまう。パターンとしてよく見かけるのは、額の十字、目と目の間の線、耳からあごにかけての点々やギザギザライン、ほっぺのうずまきやお日様マークと、まるで地図記号のよう。ほかにも手首のラインや手の甲に自分の名前を刻んだり、首から胸のあたりまで模様を彫ってしまう人もいようだ。

これらの入れ墨はヌックサートと呼ばれ、クールという黒い液体やランプについたすすを皮膚に塗りつけ、その上から裁縫用の針でついていくというまことに痛なお化粧法なのである。多くは8～15歳くらいの間に友だち同士でやってしまうとか……。遊びの一部なのかもしれない。同じくクールやすすを使って、枯草の茎などで下まぶたにほどこすアイラインは、美しくすずしいエチオピア女性の目をいっそうひきたてている。

オレンジ色に染められた爪は単なるマニキュアか

と思ったら、手首から先が同じ色で染められているようす。これはグルジェットという植物の根を乾かしたものをせんじた液に手首から先を浸し、5～10分間待つとオレンジ色に染めあがる。ついでに足首から下も染めあげてしまう。

風が強くほこりが多いせいか、男性は毛糸の帽子、女性はシャーシと呼ばれる細かい目のネット状のスカーフを頭に巻いていることが多い。このシャーシをとってもらいと細かく縞状に編まれたスレートという髪型が見られる。友だち同士、姉妹、母娘でお互いに編むことが多いが、村の青空美容室(?)に行くと50セント～1ブル(=65円)で、プロの美容師さんが編んでくれる。50セントのものだと少々粗い編み方で1時間、1ブル払うと2時間かけて細かく編んでくれる。乾燥を防ぐために地肌にケベ(ローカルバター)を塗ることも忘れない。ケベは髪を早くのばす作用もあるとか。

女性たちが口をそろえて一番好きというのは、トルフカミスと呼ばれるワンピース。首まわり、そで口、すそ、そして中心に刺しゅうのほどこされたもので、木綿地。これに端に刺しゅうと同色の模様のついたグフタと呼ばれる一枚布を頭からかぶっておもいっきりおしゃれをすると、クリスチャンは日曜日に教会へ、ムスリムは金曜日にモスクへと出かけていく。

指輪やピアスなどのアクセサリは、毎週月曜日のマーケットで素朴なハンドメイドのものが手に入る。たいていのものが10セント～2ブルぐらいだが、時には200ブル、300ブルもする品物が昔の地主などから放出されることもあるとか……。まあしかし、そんなものは高嶺の花。ほこりにまみれた50セントのリングも、美しくありたいという女性の一念で、質素に美しく彼女たちを飾っている。

アジスアベベ——もう1つのエチオピア

ファッション

・若い人は伝統的なドレスは特別な場合（結婚式等）を除いてほとんど着ることはなく、洋服を着ることが多い。既婚の人、年配の人はアジスの中でも伝統的なドレスを着て教会に行ったりするのを見かける。

映画とテレビ

・エチオピア作成の映画はなく、インドや欧米の映画が入ってきている。上映される映画の国ごとに映画館は分かれている。洋画の方が人気がある。

・エチオピアの演劇が毎週土、日に上演されるため、アジスの人たちは映画よりむしろそちらを見にでかける。

・ごく一部の金持ちは家庭にビデオを持っており、町のビデオショップからフィルムを借りて見る。

・テレビは1チャンネルだけある。ドラマ、ショーダンス、映画（ロシア、インド、イタリア）に人気がある。

結婚について

・親が探すのではなく自分で見つけることが多い。ある男性によると家具、食器類は高価で家を探すのはシナンノのワザ。なかなか大変そう……。

22～24歳の間に結婚するケースが多いが、社会に進出している女性は多い。

人気のあるスポーツ

・マラソン、フットボール、サイクリングに人気がある。フットボールはアジスに大きな競技場があり、アフリカの国々の間で競技会がある。ほかにバレーボール、卓球、ハンドボールもあるが、競技会は国内だけ。

子供たちの遊び

・男の子に人気があるのはアクロバットにフットボール。女の子はなわとびと石けり。遊びの合い間に、男の子は買い物、女の子は家の手伝いなどよく働く。靴みがきの男の子はどこへ行っても見かけるが、牛、羊の世話はほとんど大人がやっていて、村のように子供たちが世話をすることはあまりない。

女の人のハンドバックの中身

・日本と同じで化粧品、財布、ハンカチ、IDカード、手帳など。高価でなかなか手に入らないためか、ケニアのトラディショナルバックを下げているのがナウい。

女性の地位

・田舎に比べると夫にすぐ捨てられたり離婚させられたりするケースは少ない。（比率はわからない）どの国でもそうだが、女性はとても働き者である！！（鈴木美佐子）

シャージ



スレート



よく見かけるヌックサートのもよう



ソマリア人の好きなもの



おしゃれにスキは見せません

女の人はおしゃれが好き。どこの国も同じだ。頭のとっぺんから足首まで布で覆ってしまう。肌が見えるのは顔と手と足が少しだけ。ひととおり全身をチェックしてみると――。

髪は細かいくりくり毛。幼いころは短く切っているが、年頃になると三つ編みにしてのばす。そのため頭に巻くファサレーティをすると、ほどよいふんわりした丸みがでる。

目はパッチリと大きい。さらに大きく見せるために下まぶたにアイラインを入れる。

イヤリングはみんな大好き。それもピアスが。3～4歳の幼いころに木のとげで穴を開ける。好みはさまざまだが、大きくてキラキラしたものが多い。

ほとんどの人の歯は白くてきれい。これも「歯ブラシの木」の小枝でまめに歯磨きしている成果。その上に少しの炭をかんでいる。これも歯を白くするとか（ほんとかな？）

衣装は上から――

- ・ファサレーティ 髪を全部覆う。色は髪の色と同系で黒が多い。
- ・ガルバサール 頭からすっぽりかぶり、上半身を覆う。
- ・グンティーノ 1枚の布を上手に巻いて着物にする。色は原色で柄物をよく見かける。

これら3つの色合せはその人次第！ 同系統でまとめたり、自分の好きなものを組み合わせて柄や色は気にしていないようだったりそれぞれだ。

このほかグンティーノのかわりにディラというたぶぷりしたストレートのワンピースを着たりする。その時はガルバサールのかぶり方も少し変えたり（たとえば肩にかけただけにして腕を出すなど）している。

ソマリア女性のおしゃれは身につけるものばかりではない。手の先、足の先にまで行き届いている。手にはヒーナという染料で好きな模様（イラン）を描く。はじめは泥のような染料も洗い落とすとみごとなオレンジ色の模様になる。でもこれは途中で気が変わっても落とすことはできない。1カ月ぐらいは模様は消えない。

足の方はかかとが乾燥しないように(?)食用油を塗る。これも大事なたしなみ。

家はコンパクトなのが好き

ソマリアの家は移動、組み立ての簡単なおわん型のアッカルと、屋根のついたムンドルがある。日本人スタッフはムンドルに住んでいる。ムンドルは一軒一部屋で窓もドアもみんなかわいい。大柄なソマリア人にはずいぶん小さいように思う。30センチ四方しかない窓もいつも閉じられていて、ソマリア人は暗いところが好きようだ。

ムンドルの屋根はヨシのような草でふいているが天井は布張り。米や小麦粉の袋を使うこともある。すきまだらけの天井から寝ているときにボトリとサソリが落ちてくることもある。

夜が好きなソマリア人（モガディッシュ）

昼間でももちろん人は出ているが、3時から5時まで一時閉まっていた店が開き始めると、どこにこんな人がいるのかと思うほど人が集まってくる。日の暮れた6時か6時半ごろともなると、レストラン、喫茶店で甘い紅茶（ほとんど茶の味がしない甘い飲み物。ソマリア人の大好物）を飲んでおしゃれにふけている。たまには映画を見たり奮発して唯一の劇場でコンサートを聞く（切符を手に入れるのは難しい）こともある。

（船川三貴子）



アッカル



ムンドル

タイ——新興工業国へつき進む

交通渋滞は世界一

バンコクの交通渋滞は世界一とか。最近は何日に日に悪化するようだ。地盤がゆるいため地下鉄はもちろん、電車の設置にべらぼうなお金がかかってしまう。したがって都市の交通手段は車。初めてこの町を訪れた時はベント、トヨタ、バス、タクシー、トゥクトゥクといろいろ混ざり合って、その騒音とスピードに圧倒されてしまった。そしてこの渋滞。バンコク市内のどこで、何時ごろ起こるかまったく予測がつかないのだが、約束の時間に30分ぐらい平気で遅れるバンコクの住人にはいい言い訳にもなる。

既製服よりもオーダーメイド

タイ女性は昔からのサロン姿の人もモダンなファッションの学生も実にスタイルがいい。女性の私も思わず見とれてしまう。最近では多少高くても待たずに買える既製服が増えているようだが、銀行などの制服も布地だけそろえてあとは個性豊かなデザインのオーダーメイドが多い。

最近はやりの色は黒と白。若者はだんぜんジーンズにTシャツ。肩パットで肩をいからせつつも、風を切ってというよりのんびりとサンダルをつっかけながら歩いている。

盛んな女性の社会進出

女性といえば、彼女たちの社会進出は日本より進んでいるようだ。お手伝いさんをおくところが多いため、女性の家庭における負担は少ない。またおば

あさんが孫の面倒をみる場合が多いので、仕事か家庭とか、子連れ出勤ということは問題にならず、当然のこととして仕事を続ける女性が多いようだ。特にバンコクでは住居費の急速な値上がりにより、共働きの夫婦が多い。そんなことから大学ではビジネス専攻の女性が増えているということだ。

高まる教育熱

教育における熱の高まりはタイでも同じ。ポーと呼ばれる6年制の小学校の後はモーと呼ばれる中高一貫教育があるが、最近ではその最後の1年（日本の高校3年）を早めに終らせてしまう生徒が増えているようだ。これに伴い大学受験の厳しさは日本に劣らず、急速に塾も増えている。

公立大学の試験は共通一次のようなマークシート方式で4～6科目あり、この結果で4校まで面接の受けられる希望大学の学部が決まる。これに満たなかった場合は、浪人またはラマカムヘンやスコタイのように入試のない大学に行くことになる。公立大学の授業料は1単位18バーツで、卒業には140単位、その他1学期100バーツの登録料がいる。

アカデミーといわれる空軍、海軍、警察の特別コースは、前述のモー4年の後7年かかる。エリートコースのプレッシャーのため最近では自殺者もでていう。大学はアカデミーコース以外はすべて共学で制服が義務づけられている。勉強もなかなか厳しいようだ。（大石道子）



バンコクの騒音は年々ひどくなる



流行に敏感なバンコクの女性たち

© 阿佐部 伸一

カンプチア・NOW

クローマーはもう古い!?

クローマーといえばカンプチア、カンプチアといえばクローマーだと思っていたが、それはプノンペン・ファッションにはそぐわないことがわかった。

クローマーは格子柄のカンプチア版日本手ぬぐいである。綿100%, 綿絹混紡, 絹100%の3種類があるが、一般的なものは綿100%, 色も探せばいろいろあるが、最も多いのは赤、次いで青。かたくなにクローマーは赤と決めているところは、日本手ぬぐいが白地に紺を守りぬいているところと似ている。日本手ぬぐいの使用範囲は限られているが、クローマーの日常生活への貢献度はすばらしい。ハンカチ、タオル、バスタオル、帽子、男性用腰巻、子ども用ハンモック、タオルケット、ふろしき、ふきん、雑巾と次々に早がわりする。

さてここで話題にしようとしているのは帽子としての役割である。ほとんどすべての人がクローマーを無造作に頭に巻いて灼熱の太陽から身を守っているのだと思っていた。しかし、プノンペンのナウい人々は絶対にそんなことはしない。クローマーをマフラーのごとく首に巻いて喜んでいるのは日本人を含め異人さんだけである。プノンペン市民から見ればこれはもう完全な田舎者である。では何がナウいのか?

一番かっていいとされているのは、ソ連もしくはチェコ製のフェルト帽子である。どうしてあのように暑苦しいものか理解に苦しむが、みんなの憧れの的なのだ。1100リエル(約750~1000円)

サンボットをはいた女性



クローマー



フェルト帽



もする代物で、ベテラン助産婦の月給が800リエルだから、日本におけるルイ・ヴィトンのバックやエルメスのスカーフ以上のものだろう。フェルト帽子は高嶺の花なので手が届かない場合は毛糸やボアの帽子をかぶっている。とにかく見た目に暑苦しいのが好きなのだ。

帽子はかってよくても帽子でしかない。断然利用価値の高いクローマーは日本手ぬぐいと同じ運命をたどるのだろうか。これが「経済発達」なのかもしれない。

サンボットはミニになりうるか

カンプチアで忘れてならないものがもう一つある。サンボットである。サロンとスカートの合いの子のような女性の服は今も変わらず愛されている。無地柄、刺しゅうをほどこしたものなどがあるが、どの店もほとんど同じ柄を扱っており、あちらこちらで同じサンボットをはいた女性を見かける。日本で同じ服を着た人に出会うと、あの恥かしいような何ともいえない気持ちにおそわれるが、カンプチアでは仲間意識が生まれ、知らない人でも話がはずんでしまう。サンボットの種類はまだそれほど多くはないが、その中で充分ファッションを楽しんでいる。

丈は膝とくるぶしの間が通常である。以前に「マキシー」といって、くるぶしまでの長い丈でフレア一ぎみのサンボットが流行したとのこと。フランスの影響らしい。ひざ丈のサンボットがあっても素敵だと思うが、こちらの女性にしてみればとんでもな

いとらしい。「足を見せるなんてとんでもない」
とか。あと10年ぐらいすればミニも現れるだろう。

日本の緋に似た絹のサンボットはカンブチア女性の晴着である。若い人向きの柄、お年寄り向きの柄とだいたい決まっている。これもまた赤が断然多い。古典柄が愛され、モダンな柄は若い人でもあまり選ばない。老いも若きも伝統を好んでいる。非常に高価で、2000～5000 リエルと買うには一大決心を要する。しかし60年たっても着ることができるといふ。着古された絹のサンボットが子どものスカートにリフォームされているのを見た。日本で着物が洗い張りを繰り返して、親から娘へと受けつがれていたのと同じ。

日本の着物は形だけが残った。数回着るだけの高価な振袖が娘に孫にと受けつがれ、果ては座ぶとんカバーになるまで使われているかどうか。日本で失われたものをカンブチアで求めるのは正しいアプローチではないが、郷愁を禁じえず、サンボットはいつまでも愛されていてほしいと思う。

サタデーナイト・フィーバー

ディスコが大流行している。プノンペン市内では雨後のたけのこのようにあちこちにディスコホールが誕生している。もう5本の指では足りない。なんだそれだけかと言うだろうが、これはすごいことである。ディスコに行くなら女性はスラックスにブラウスがかっこいい。この格好をしていると、「ディスコ」と呼ばれる。サンボットならカンブチアカラオスの絹のサンボットだが、これは少々オーソドックスになる。プノンペン流行の先端を知りたいればディスコに行けばよい。音楽はスローテンポなものがほとんど。今ひとつノリに欠けるが、カンブチアの風土によるものだ。これにノレなければカンブチアの流行の先端は走れない。

タイ製自転車は人気の的

今、プノンペンっ子のほしい物ナンバーワンはタイ製自転車である。ピカピカの赤い自転車に乗り、フェルト帽をかぶってすましてシクロを追いつくのがかっこいい。2万リエルという高価格にもかかわらず、たくさんの人が乗っているのはいったいどうしたことなのだろう。財布の中をのぞいてみたいものだ。

次いで多いのがカンブチア製。部品は日本製でカンブチア国内で家内工業的に組み立てられている。



映画館に群がる人々

約1万1000リエル。故障もしないし、なかなかかっこいいのだが、カンブチア人の目はタイ製に釘づけになっている。タイ製に手が出ない場合、しかたなくカンブチア製になる。

一方でソ連製が少数ながら派閥を持っている。ミニサイクルをもう少し小さくした自転車で7000リエルぐらい。これなど全然憧れの的にはならないようだが、私は愛好者である。何といっても安いし、ほかの自転車は足が届かなかった。

映画館は満員御礼

プノンペンでの娯楽施設といえば映画館・ビデオ館がある。色彩豊かな看板をあちこちで見かけるが、ほとんどはビデオ館である。ビデオ喫茶もあり、通りからタダで見られないよう入口は狭く、見えるようで見えないのれんを垂らしている。店の構えを見ると日本人の感覚ではいかがわしい所かと思うが健全な施設である。

目抜き通りにある映画館では新しい映画が封切られたばかりである。タイトルは「1000回泣く」。封切り時は映画館の入り口が華々しく飾られていた。上映時間は8時、14時、16時、18時と1日4回。前作は3回上映だったので今の映画はかなり人気が高いようだ。あまりの人の多さにめげて実はまだ鑑賞していない。

それにしても入り口の鉄格子扉はなんとかならないものか。絶対見せてやらないぞといった風なのだ。時々、映画の音声だけを外に出しており（これがまたうるさい）、それを聞いているのか、次回の上映を待っているのか、多くの人が鉄格子にしがみついている。しかし中は何も見えない。次回上映まで1時間以上もあるというのに、道路にまであふれて人々は待っている。平和である。

料金は2階席が40リエル、1階席が30リエル。やはり日本の映画料金は高すぎる。なんとかしてほしい。
(杉江美子)

伝言板

1989年9月8日～10日 法政大学

「地球環境と日本の役割を問う 国際市民会議」

環境問題はいまや人類共通の課題となっている。日本政府も今年を“環境外交年”とし、環境問題に強い関心を示しているかに見える。9月11～13日までは「地球環境保全に関する東京会議」(仮称)を開催することが決定した。しかしこの国際会議では日本が世界の環境に及ぼしている強い影響力や、これまでこの問題に対する消極的な姿勢を問われることなく終わるのではないかと危惧されている。結局環境問題に関する日本のイメージアップに使われるだけで環境に関する政策や国民の意識を高めることにはならないのではないだろうか。

そこでこれを危惧する市民グループは、この機会に地球の環境問題及び国内の環境問題に関して何をなすべきかに焦点を当てた自分たちの手による国際環境会議を開催することを決めた。世界から環境問題の専門家、環境団体で活躍している人たち、また環境破壊が原因で直接の影響を受けている先住民を招待して行う。

エチオピアの仲間たちと 語ろう

エチオピアのJVCプロジェクトで働くスタッフが日本にやってきました。環境教育のために行っている寸劇、現地のスライド、エチオピア料理の実演を通して本当のエチオピアを実感して下さい。

9月から10月にかけて各地をまわります。お近くにお住まいの方はぜひご参加下さい。

来日するスタッフは、エシャトウ・カプティーマ(28歳 教育担当)、ダニエル・アビチュウ(28歳 物資輸送担当)の二人です。エチオピアのこと、日本のこと、大いに語りあいましょう。

プログラム

9月8日 全体会議 — 問題提起

(6:00PM～9:00PM) 野間 宏、パイアカン(アマゾンインディオ・リーダー)、マーチン・コー(マレーシア地球の友)、根本順吉

9月9日 分科会 ●地球温暖化とオゾン層の破壊

(9:30AM～9:00PM) (担当 エントロピー学会東京セミナー)

●有害廃棄物問題

(担当 有害廃棄物を考える会、グリーンピース)

●熱帯林の破壊

(担当 熱帯林行動ネットワーク)

●種の多様性

(担当 地球の友)

●ODAと第三世界の環境破壊、ならびに債務問題

(担当 ODAを考える会)

●第三世界における地域の自立

(担当 JVC)

9月10日 全体会議 — 行動提案

(10:00AM～3:00PM)

*この会議への詳しいお問合せと参加の申し込みは下記の実行委員会で受けつけています。

「地球環境市民会議実行委員会」

〒150 東京都渋谷区鶯谷町7-1 渋谷マンション801
TEL 03-770-6308

*参加費 通し券 3,000円 一日券 1,000円

*会議開催へのカンパもお願いします。

郵便振込 東京 8-140021 地球環境市民会議

スケジュール

9月22日 「マーシャ村講演会」 6:00PM～8:00PM

場所 大阪電気クラブ

主催 毎日新聞社

TEL 06-202-1189 (小島)

9月23日 「エチオピアのつどい」

場所 大阪国際交流センター

連絡先 嶋 紀晶 TEL 0745-72-0508

9月30日 「アフリカの集い」 4:00PM～7:30PM

場所 横浜女性フォーラム(JR戸塚駅)

連絡先 JVC TEL 03-834-2388

10月3日 「マーシャ村からの声」 6:30PM～

場所 山形 パレス平安

連絡先 Tree for life の会

TEL 0236-33-3313 (武田節子)

JVCプロジェクト

1989年6月25日 現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 星野昌子（事務局長） 熊岡路矢，林 達雄， 前川昌代，鍋田三芳， 加藤志保，富安光子， 岩崎美佐子， アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画、運営。		山口誠史，
日本国内	●定住難民プロジェクト パナニコム日本語学校のスタッフから依頼された日本の文化紹介のためのスライド作りを進めている。岡村，柿木両ボランティアの協力で、これまで「街の風景」「定住促進センターでの生活」「家庭での生活」「職場での生活」「学校での生活」などを取材した。近々現地へ届ける。 機関誌『もしもしあのね』は内容の充実を目指して検討中。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，国際交流ホスピタリティラスト，日本少林寺拳法連盟，ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●総合的復興促進（マーシャ） 1. 植林，土壌保全 昨年10月より今年の植林に備えて50万本の苗木を準備中である。また農業省の協力で植林予定地も近々決まる予定。 豪雨のため，新たに掘られたみぞへのチェックダムの建設，また破損した既存のチェックダムの修繕も行われている。 2. 母子保健・栄養 種々の訪問形式による指導に加えて母親学校が1月よりアダグイヤで始まった。 3. 髄膜炎に関する支援 エチオピア南部から流行しはじめた流行性脳髄膜炎がウォロ州にも広がり，コレブ地区でも500人前後の患者が見られた。JVCでは予防接種の輸送等に関する支援をコレブ，デブラザイトのクリニックに対して行っている。	CRDA，WFP， 犬養道子・みどり一本運動，モラロジー MIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会，中部善意銀行，朝日新聞厚生文化事業団，毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜，山田 盛， 江原浩昭，江原広美， 南部良一，イエットベルク，ソロモン，パレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 去る3月に突発した「定住難民の撤退命令」事件はこの命令の発令者である郡長と区長に対し、政府内務省から命令の撤回を指示する電文が届き一応解決した。しかしその一方で、「定住者の選択委員会」の新設がUNHCRやNRCから提案された。従来実質的にはJVCが行ってきた定住者の選択を、内務省、NRC、農業省、UNHCR、JVCの各々の出先機関で構成される当委員会が行うという。もしこのとおりに実行されると、政府の各出先機関や地方権力者などの影響をJVCもさらに受けやすくなる。JVCとしては、これらの機関と従来築いてきた関係をテコに、今後も主導権を握れるように努力してゆく。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, シアッド, ムハボ, 磯田厚子, 中野周二, 羽田尚由, 船川秀夫, アオキ, アブディナサル, ヒレ, シュクリ
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 既存の農場では4月の雨期直後に播いたメイズなどが順調に育っている。主水路沿いに防風林の苗木を農民たち自身で植林し終えた。新農場の開墾は40haまで進んだ。	R.I.-Japan 創価学会青年平和会議	ラジッド
カンブチア カンポット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエップ技術学校／ワークショップ 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え、現在そのうち5台が稼働中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台、溶接や塗装などの修理を入れると約120台のトラックの修理を行ってきたことになる。カンブチア人スタッフは現在30名おり、その中には技術学校の第一期卒業生15名が含まれている。第二期の授業は88年11月から1年間の予定で開始され、52名の生徒が学んでいる。今年度の目標は、生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため、エンジン・車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため、トラック10台分の新品のスベーパーツとパッキン等定期交換部品10台分が必要とされる。 ●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動) プノンペン郡の16カ村を対象とした巡回母子保健活動(Mobile RINE)は第1回目を5月16日に終了した。7月7日より第2回目の実施を予定している。Mobile RINEはRINEセンターを利用しやすくするため、試験的に開始されたものである。活動を継続するなかで、その意義と方向性を検討しなおす時期にきている。活動拠点はセンターなのか、各村々なのか。後者ならばMobile RINEではなく新たな活動が必要である。 6月9日より産科病棟の新築にとりかかった。完成まで3カ月を要する。 保健衛生教育、補助給食の試食をしてもらっている。 ●井戸掘り・給水 今年最初の井戸掘りは2月22日に着工され、プノンペン市にある中等教育を行う先生の養成所に井戸が完成した。その後、カンダール県内で5本の井戸が掘られた。4月以降コンボン・ソム市で7本、カンポット県で6本、コンボン・スプー県で2本の井戸掘りを行っている。	創価学会青年平和会議, モラロ ジーMIRC, 立正佼成会, 日産 労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京教区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター, 四日市商業高校, 日蓮宗宗務院, 横浜市「世界ふれあいキャンペーン」, 「お告げのフランシスコ姉妹会」, 日本海事センター, 中部善意銀行, 「カンボジア会」, チャリティーカレンダー, 堺市ロータリークラブ, 日本ボーイスカウト広島第20回	簗田健一, 馬 清, 古西 勇, 杉江美子 (カウンター・パート) (運輸省) タック・カン, アム・ ディエン, メアス・サメ ット, ゲット・ソーン, カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師 (農業省水利局) セン・ロー

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンブチアを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 以前 JVC が掘った井戸の状況調査を行った。 バンコクよりスタッフがプノンペン、ビエンチャンを訪問。現在 NGO ベースでカンブチア難民本国帰還に関し、プノンペンとタイ側の団体間で情報交換を行い、連帯を強めるための話し合いを始めている。	全国社会福祉協議会 電力労連	ボンピモン、カモン、 大石道子、チャタヴァデ
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 未登録難民のバンタットキャンプ移動にともない生徒が激減し、一時沈滞ムードであったが、6月21日22日の両日にかけて基本衛生と教育奨励のための展示会があり、その出品作品（車、単車、井戸掘りなど）のためにスタッフ一同集中して作業にあたった。 Site 2 の近辺の戦闘で延期になっていた残りの未登録難民の移動が来月中に決行される予定。	UNHCR, SV(Stichting Vluchteling)	ソムヨット、清水俊弘
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ●日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化、習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ●他国定住予定者へのプログラム 6月30日、文化オリエンテーションを行った。今回は日本の料理だけでなく、カンブチア、ベトナムそれぞれの料理を披露してもらい、文化交流の場にした。 日本語学校の生徒数 カンブチア 38人 ベトナム 4人	天理教千葉 R.I. - Japan	鈴木由子、竹村雅義、 熊沢ゆり、アナン、 久津輪雅、北詰秋乃
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 学校及び家庭を訪問し、88年度のレポートを作成している。 ●クロントイ図書館 6月24日、主婦ボランティア活動日に、子供たちによる人形劇を披露した。 ●スラム生活改善プロジェクト 高速道路建設に関する NGO 間のミーティングに参加した。 ●農村開発 ブリラム県の M 村で多角農業を奨励し、小学校で給食プロジェクトを行っている。	モラロジー MIRC、 Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロブチミスト 駿河、長谷川勉 チャリティーウ ォーク、JOFIC 電力労連、から し種、チャリテ ィーカレンダー	ワティット、サムルア イ、リーラ、コメン、 今泉 恵、 ガームシン
ラオス （ヴィエンチャ ン県 ボーリー・カ ムサイ県 カムムアン県）	●生活改善指導員養成プロジェクト 3月1日に、JVC がヴィエンチャンに建てたミタパーブ友好母子トレーニングセンターの開所式が行われた。今年度は5月からこのセンターで、母子保健、幼児教育の普及員を養成する。来年度は農業改良普及員を養成し、母子保健、幼児教育の普及員と同じ地域を対象に、相互に協力して農村の包括的な生活改善普及活動に当たる。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑 を考える会 横浜インターナ ショナル・ウイ ミンズクラブ スコティッシュ・ ナイト・イン・ 専修寺、聖ヨゼフ 老人ホーム、堺市 ロータリークラ ブ、老人ホーム 天寿荘、チャリテ ィーカレンダー	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

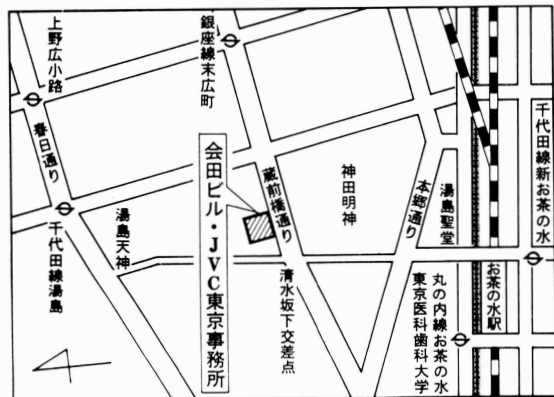
- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (6月小計 25,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (6月小計 577,006円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (6月小計 21,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (6月小計 282,750円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (6月小計 26,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (6月小計 40,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (6月小計 6,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (6月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (6月小計 5,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (6月小計 175,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (6月小計 659,000円)

編集後記

▶ジュネーブの国連本部人権センターの久保田洋さんが、6月27日ナミビアで交通事故のために亡くなられた。11月に行われる総選挙のため国連から派遣されたばかりだった。久保田さん御自身もさぞかし無念だったと思われるが、私たちNGO関係者のショックも大きい。以前本誌にも寄稿していただいたことがあり、当時の編集長だった下蘭宏司さんがさっそく新聞の切り抜きを送ってくれた。久保田さんは数少ない人権問題のエキスパートだった。「良き理解者を失って寂しい」と下蘭さんは手紙に書いている。あらためて久保田さんの存在の大きさを知ると同時に、受け取り手のいなくなった封筒の宛名が悲しかった。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (6月小計 108名 652,889円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年7月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
発行人 星野 昌子
発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC
神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。